

第 10 章 バングラデシュとスリランカの雑穀

10.1 バングラデシュ

はじめに

バングラデシュには調査に行くことができなかったため、文献から雑穀栽培に関する事例を引用して、その概要を整理する。ポチェ（1999）は現場を分析しにくる西洋人は自分の都合に合わせて目に見えるものを選別することでしか、まともに物事を考えられない人間が多く、細心の注意を払う必要があると述べて、バングラデシュの事例をあげている。

10.1.1 自然環境と歴史、民族

1) 自然環境

バングラデシュはインドとミャンマーに隣接し、アッサムの北にはブータンと中国が位置している。その面積は 14.4 万 km²、大部分が沖積平野で、一部に丘陵と台地がある。ガンジス、ブラマプトラ、メグナなどの国際河川が縦横に流れ、常習的に洪水が起こる。これら河川のベンガル湾への年間総流出量は 1 兆 6 千億トンである。熱帯モンスーン気候帯にあり、雨季（4 月～9 月）と乾季（10 月～3 月）をともなっている。年間の降水量は西部地域の 1500 mm 以下から南東部のチッタゴンの 3000 mm 以上と地域差がある。沖積平野のデルタ地帯では洪水対策として、土を削り、あるいは土盛りして集落の居住地や耕作地などを形成してきた。丘陵地域はアラカミヤンマーから続くアラカン山脈の支脈である。

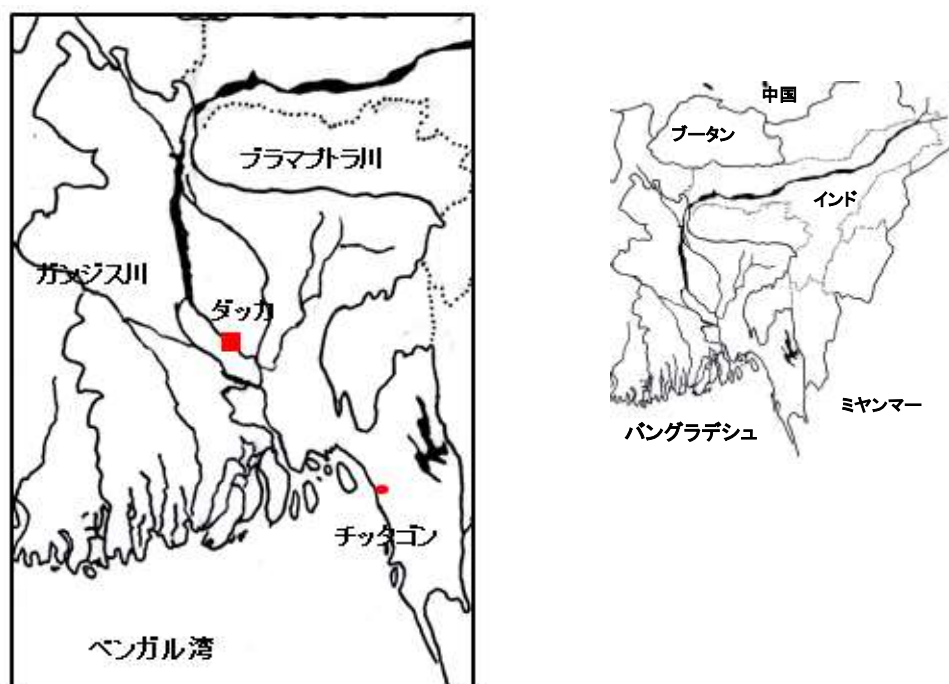


図 10.1 バングラデシュの概略

2) 概略史

中東からムスリム商人が9世紀には港町チッタゴンに訪れていた。13世紀になって、イスラムの影響が強くなり及ぶようになった。ムスリム王権は西ベンガルに拠点を置いていたが、東ベンガルはセーナ朝やデーヴァ朝の支配下にあった。17世紀になって、ダカがベンガル州の首都になった。18世紀後半にはイギリス東インド会社がベンガルの覇権を得て、このイギリス領時代の19世紀に東ベンガルはムスリムの人口が急増した。東ベンガルには低湿密林地帯などに未開墾地が残っていたので、入植し開墾に従事したのが多くのムスリムであったことが主要因である {臼田雅之、谷口晋吉}。

3) 民族

バングラデシュの人口(2017)は、約1億6千500万人で、このうちのおおよそ3分の2にあたる1億人以上が農村部に暮らし、残りが都市部に居住している。

バングラデシュの多数民族はベンガル人、彼らの90%以上がムスリムで、ベンガル語を用いている。北西部にはドラヴィダ語系諸族(Oraonなど)とムンダ語系民族(サンタル)、中北部にはボド・ナガ語系(主にガロ)、北東部にクキ・チン語系(モニプリなど)とモン・クメール語系(Khasiなど)、さらに、南東部のミャンマーに接するチッタゴン丘陵地域には多くの少数民族、チャクマ Chakma(自称 Tsakma, Sakma、約35万人、仏教徒)、ブム、チャク、キャン、クミ、ルシャイ(ミゾ)、マルマ(約14万人、仏教徒)、ムラン、ムル、パンコー、ラカイン、シャオタール(サンタル)、トンチョンギヤ、ティペラ(トリプリ、約6万人、ヒンドゥ教徒)など13の少数民族(合計約60万人、1981年国勢調査)が居住している。パキスタンの時代にインドからムスリム難民の人々が入植し、人口が増加、少数民族の人口比率は減少してきている。

歴史的に見ると、平地ではベンガル人が水稲耕作を、丘陵地や海岸地帯では少数民族の人々が焼畑農耕、森林利用、漁業や交易をおこなってきた。近年、ベンガル人の人口増加を主要因として、多くの人々は土地なしや零細農民になり、紛争が多発するようになった。

丘陵地域の民族の中で人口の半数を占めるチャクマはベンガル語チッタゴン方言に強く影響されたチャクマ語を使用している。焼畑農耕から稲作や果樹・ゴム栽培に移行してきた。1963年に完成したカプタイ・ダムにより彼らの住居や耕作地の良質な40%が水没した。その後、提供された代替地は面積も3分の1、傾斜未耕地で、農業生産をあげることは困難で、焼畑耕作も禁止されて、チャクマの人々は生活に困窮した {高田峰夫}。

現在はミャンマーからのロヒンギヤ難民の問題が関心を集めている。1978年からロヒンギヤの人々がバングラデシュに流入するようになり、以後、流入、帰国、または他国への脱出が繰り返されてきた。2017年のARSAの襲撃をきっかけに、ミャンマーのラカイン州から約70万人のロヒンギヤの人々が難民化してバングラデシュのコックス

バザール県のキャンプに収容された。今、彼らのうちの 7~10 万人を無人島に移動させる計画が進められている。{注：「アラカン・ロヒンギャ救世軍」(ARSA)は、ミャンマー北西部・ラカイン州(旧アラカン州)北部に居住する少数派のベンガル系ムスリム、ロヒンギャから成る反政府武装組織である。2012年に同州で発生した仏教徒とロヒンギャの衝突事件を機に設立された。}(著者不明 2018、シンポジウム配布資料)

4) 村落生活

ザミンダールとライヤット関係はムガル時代からの領主と領民という位置にある。ザミンダールは地主であるが、自らは農業に従事せずに、経営を中間地主に任せて、自らは都市で暮らしていた。彼らの多くはヒンドゥの上位カーストで、一方、小作人はムスリムが多かったので、激しい争い(聖戦)が起こった。

1950年にザミンダール制は廃止されたが、1980年代の国勢調査によると、農民の土地所有はあまり変化せず、少数(9%以下)の富農(5エーカー以上)が耕地面積の半分ほどを所有し、人口増加に伴い農地の細分化が進み、零細農家が著しく増えた{藤田幸一}。

10.1.2 農業

バングラデシュの農業は稲作が大半を占めている。したがって、ここの農耕期は、卓越する稲作やジュートの栽培から3期に分けられる。第1農耕期(アウスまたはバドイ)は4月から8月、天水田で主にアウス・イネ、加えて散播アマン・イネおよびジュートを栽培する。第2農耕期(アマンまたはアガニ)は8月から12月で、主に移植アマン・イネを栽培するが、野菜や豆類も作る。第3農耕期(ボロまたはラビ)は12月から4月の乾季で、灌漑によるボロ・イネ、野菜、マメ類を栽培する。{注：アウス、アマン、ボロはイネの生態型と理解できる}

バングラデシュで栽培されてきた雑穀は、アワ(kaon)、キビ(cheena)、インドビエ(shama kaon, bhura kaon)、シコクビエ(ragi)、コドラ(kodo)である。これらのうち、シコクビエとコドラはごく限られた地域の、肥沃でなく他の作物が栽培できないようなところで栽培されているにすぎない。アワ、キビおよびインドビエは全国で栽培されてはいるが、河川敷のような周縁の農地で栽培されている。農家は飢饉に供えて、環境変動に強いこれらの雑穀を栽培している。表 10.1 に 1970 年代初頭と 1980 年代前半の穀物生産を示した。農家は低い収量の雑穀在来品種を栽培し、非常に少ない収穫を得てきた。近年、70 年から 80 年代にかけてみても、イネやコムギの高収性品種の栽培面積や生産量の増加によって、雑穀の栽培面積や生産量は顕著に減少してきている。雑穀の低収量(700-800kg/ha)は肥沃でない土壌で、改良品種、肥料、灌漑水、殺虫剤および改良技術を使用しないことによるものだ(Majid, Hamid and Mannujan 1989)。

表 10.1 バングラデシュの穀物生産

穀物	1972-73			1983-84		
	栽培面積 ×10万ha	生産量× 10万トン	収量kg/ha	栽培面積 ×10万ha	生産量× 10万トン	収量kg/ha
イネ	96.297	100.889	1047	105.48	145.075	1375
コムギ	1.201	0.910	757	5.26	12.115	2302
雑穀	0.679	0.486	716	0.367	0.317	865
オオムギ	0.259	0.164	631	0.096	0.066	684
その他の穀物	0.039	0.032	813	0.024	0.017	718
合計	98.475	102.481	1040	111.227	157.590	1417

出典: Bangladesh Bureau of Statistics

バングラデシュの最近の穀物生産量は表 10.2 に示したように、イネは 4898 万トン、トウモロコシは約 303 万トン、コムギは約 131 万トンである。雑穀は約 1.5 万トンで、オオムギとモロコシはともに千トンに満たない。

表 10.2 バングラデシュの穀物生産 (2017 FAOSTAT)

穀物	栽培面積ha	生産量tonnes	収量hg/ha	hg=100g
オオムギ	329	287	8723	872.3
トウモロコシ	389878	3025392	77598	7759.8
雑穀	12500	15000	12000	1200
イネ	11272000	48980000	43453	4345.3
モロコシ	83	92	11084	1108.4
コムギ	415339	1311473	31576	3157.6

図 10.2 (上) によると、1961 年から 2017 年にかけて、イネの栽培面積は横這いであったが、生産量が 5 倍ほどに激増してきたことがわかる。すなわち、天水農耕から灌漑農耕へと栽培技術が向上することによって収量が著しく増加したということである。これに対して、図 10.2 (下) に雑穀の生産に関して拡大してみたところ、1970 年代まで 6 万トン前後の横這いであったが、80 年代になって 14 万トンにまで急増し、その後、漸減、さらに 90 年代後半に急減するようになった。この間、モロコシの生産量は少量横這いで続いてきた。

稲作における技術革新は農業の商業化をもたらして、地主・小作関係の土地問題、小作制度の変更、土地なし農民の大量創出、土地紛争の頻発などが起こってきた。農業開発は機械化の進行よりも、労働需要の高まりが著しかったのだ {菱口善美}。

バングラデシュの伝統的な作物栽培は、雨季と乾季のカリフ作物とラビ作物に大別され、雑穀はコムギや野菜と同じく乾季ラビの畑作物である。雑穀は一般にカリフの作物であるのだが、キビはバングラデシュやインドの西ベンガル・ビハールではラビ

の栽培、すなわちイネの後作になっている点に注意する必要がある。

バングラデシュで雑穀は多く栽培されているわけではない。しかし、雑穀は異なった農業生態系への適応および耐乾性のために重要な位置を占めている。すなわち、作物がうまく育たない状況においてさえも、限られた施肥でも相応の収穫を確保することができる。また、このために、雑穀栽培と関わった次の3作付体系が行われている。①夏季のマメ、コムギ、雑穀、②ジュート／散播イネ、移植イネ、雑穀、③雑穀、移植イネ、ジャガイモ／カラシナ (Islam 1993)。

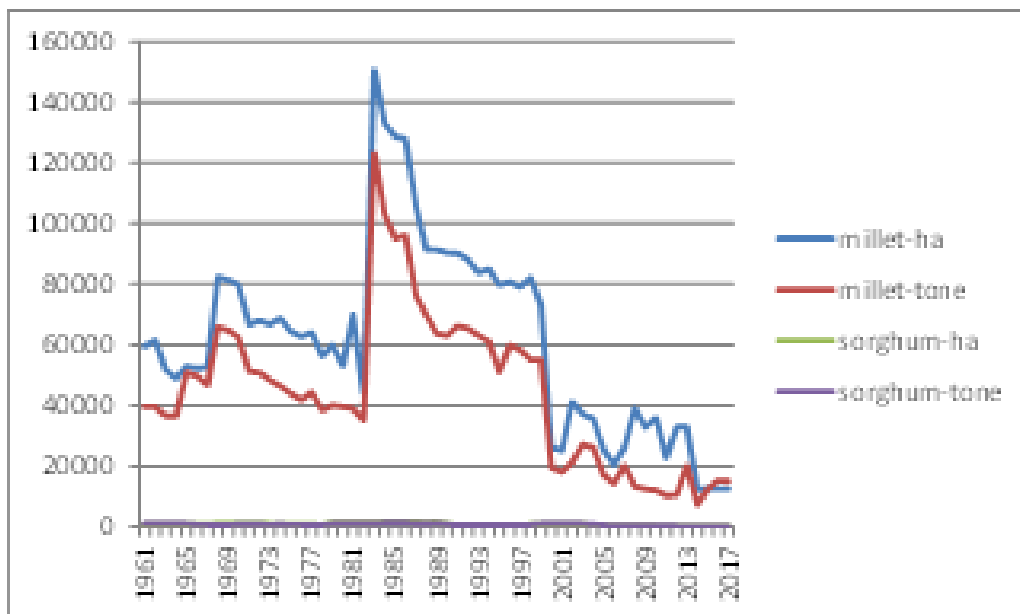
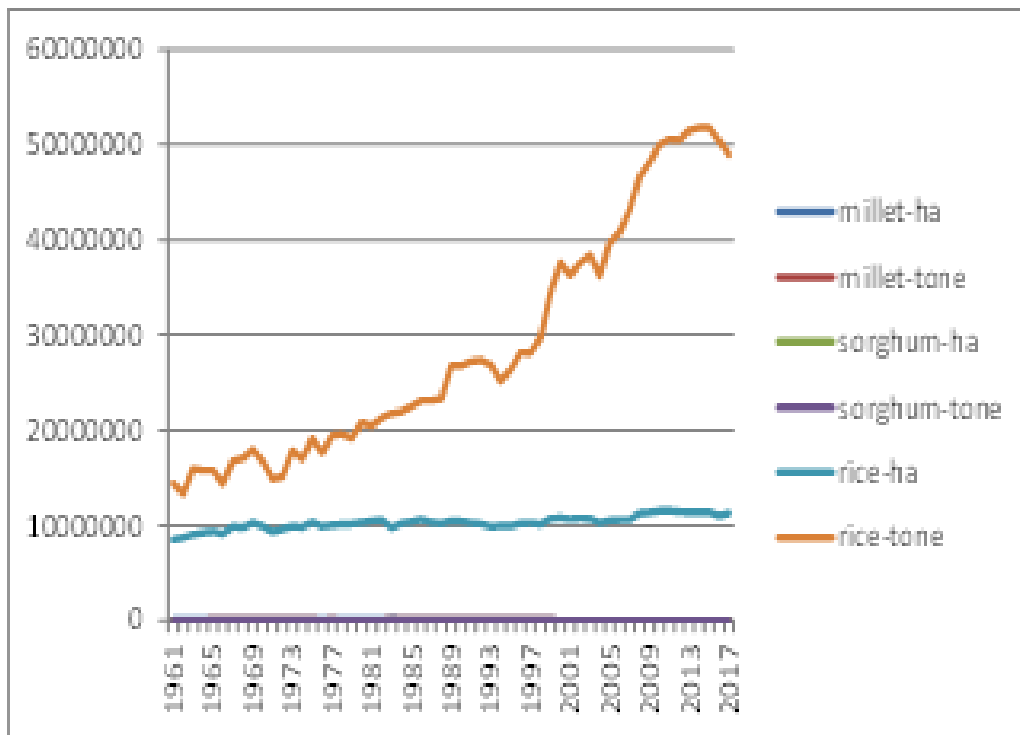
ドッキン・チャムリア村の事例では、キビ(チナ)やアワ(カウン)も栽培されていた。散播アマンの後作にキビ、アワが栽培されていた。住居近くではジュートとキビが栽培されることもあった。キビは12月直播し、3~4月に収穫していた。イネ米とキビは混炊しめしに、これにマメやムギ類を混合した雑炊(ケチュリ)を調理した。乾季の短い生育期間で収穫できるキビは伝統的にも、飢饉対応においても重要な雑穀であった {安藤和雄・内田晴夫}。

バングラデシュにおける1974年の洪水にともなう飢饉の際には、貧しい人々は二重に排斥された。アメリカ政府はバングラデシュ政府からPL480条に基づき、食料援助の要請があったが、恐らく、キューバにジュートを輸出しているという理由で、これを拒否した。この結果、貧しい人々には食糧が行き渡らず、政治的に影響力のある集団の利益になってしまった(ポチェ1999)。しかし、図10.2によると、1974年の飢饉時にもイネの生産量は100万トンも落ち込んではいない。その後、1979年と1984年の飢饉の際には、アメリカ合衆国からの食料援助を受けて、惨事を回避することができた。また、1983~84年に雑穀の生産量が3~4倍に急増していた。

東京学芸大学で保存してきたバングラデシュで収集した穀物は表10.3に示した。合計はたったの11系統であったが、少なくともアワ、キビ、コドラが栽培されている証拠標本ではある。

表 10.3 バングラデシュで収集された穀物類

Spices	strains
<i>Hordeum vulgare</i>	1
<i>Panicum miliaceum L.</i>	2
<i>Paspalum scrobiculatum L.</i>	1
<i>Setaria italica</i>	7
Total	11



Bangladesh

図 10.2 バングラデシュの穀物生産の推移

ベンガルではイネ、アイ、ジュートなどの商品作物の生産が 19 世紀後半から増加した。ジュートの商業的生産が多くなり、その収入でイネ米を買うようになった。しかし、1920 年代の世界大恐慌で、貿易量が減り、ジュートの需要も減少し、農民は困窮

することになった。この状況の延長上に、1943年のベンガル大飢饉が起こった。第2次世界大戦中であり、日本軍がビルマに侵攻したので、対抗するイギリス軍の軍事作戦により稲作生産の不調に重ねて、軍用に強制的に買い上げたので、イネ米が不足し、価格が高騰して、食料不足が進み、数百万人の餓死者が出た {谷口晋吉}。

10.1.3 食文化

雑穀は粳摺り後、イネ米と同じように利用されている。最近では、アワは甘いスナックにもなっている。アワのパーボイル加工の手順はイネ米と同じである。また製粉もする。バングラデシュは伝統的にイネ米を食べてきたので、コムギ、マメ、雑穀などの栽培面積は減少傾向にある。雑穀はほかの作物よりも低価格なので、貧困層の人々が食べている。しかし雑穀は多様な利用もできる高品質な食材であるが、農家はこのことを知らない。雑穀の再評価が進めば、市場価値も改善されるだろう (Islam 1993)。

10.2 スリランカ

はじめに

スリランカには調査に行くことができなかったため、文献から雑穀栽培に関する事例を引用して、その概要を整理しておく。

10.2.1 自然環境と歴史、民族

1) 自然環境

スリランカはインド亜大陸の南端、赤道に近くに位置し、おおよそ南北 435km、東西 225 km、面積は 65,500 km²の島国である。インドからはポーク海峡で 30km の距離にある。南寄り中央部に高地があるので、熱帯モンスーンは乾燥、湿潤および標高差により多様な気候を生起させる (図 10.3)。最も高い山は Pidurutalagala (2,524m) である。赤道下にあるので、年間の平均気温は 27°C、季節はモンスーンによってのみ決定されている (Discovery Channel 2004)。

スリランカの季節を詳細に見ると次のようである。①北東モンスーン期 (11月から3月) は、北東部を中心に全島に雨を降らせる。この雨で天水田稲作を行う (マハ季)。②インター・モンスーン期 (4月) は無風期間で、時折雷雨がある。③南西モンスーン期 (5月から9月) は、南東部を中心に雨が降る。この雨で水田稲作を行う (ヤラ季)。北東部は降雨が少ないので、乾燥する。④インター・モンスーン期 (10月) は4月と同様に無風期間で、時折雷雨がある。こうした降雨の偏りによって、南西部は湿潤地帯になるが、他の4分の3の地域は乾燥地帯になる (杉本 1987)。ヤラ季に灌漑が可能なところではタバコやトウガラシなどの商品作物を栽培する。一年中地下水灌漑ができる肥沃なところでは、ジャガイモ、タマネギ、ナスなどの野菜の他、シコクビエの

伝統的な移植栽培もおこなわれている。耕作困難な場所にはパルミラヤシなどが植えられ、樹液から酒や砂糖を作っている。

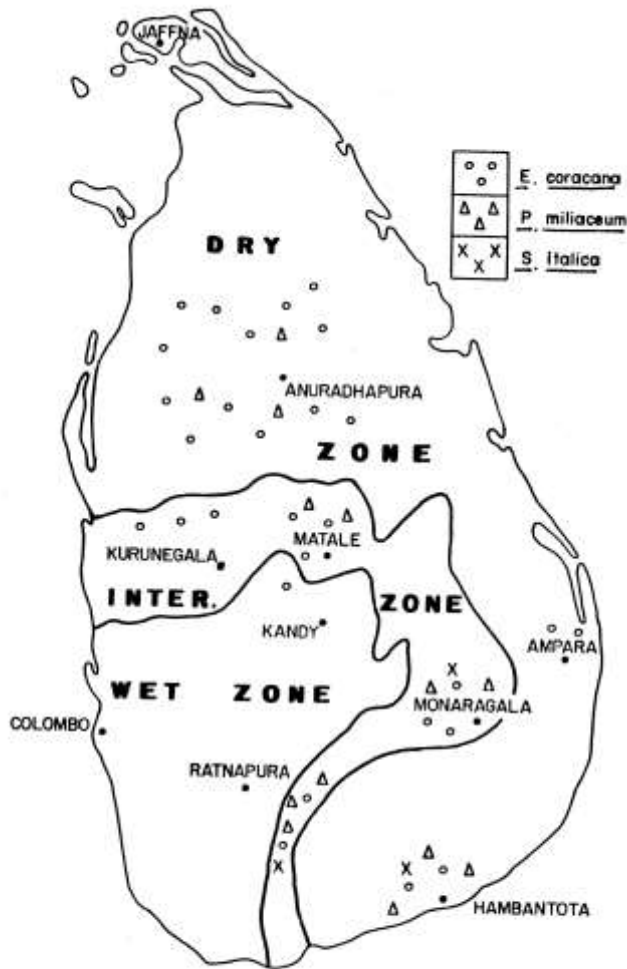


Fig. 1. Important areas of millet production in Sri Lanka

図 10.3 スリランカにおける雑穀栽培の重要な地域 (Ponnuthural 1989)

2) 概略の歴史

先史時代に関する資料は少ないが、新石器時代の物証、石英の道具や原始的な土器は見つかっている。紀元前 3 世紀頃から波浪状起伏型の微地形を利用して灌漑用の溜池が造られた (中村 2002)。この島の先住民は原始人種の特徴を持っており、現存する民族の中では、原始民族とプリンダー族とを結びつけることによってウェッター族 Weddhas が最古の民族と考えられている。しかし、実際には、ジャングルに暮らす人びとを示す一般名称のようだ。南インドと共通する巨石文化が見られ、紀元前から両地域は交流があり、紀元前後に、南インドのマラバール (ケララを含むタミル地域) から流入があった。北インドからの鉄器をとまなう農耕文化も同時期に伝播していた。BC243 年に仏教が伝来して、シンハラ族の形成に強く関与した。アヌラーダプラ時代 (前

2世紀～1017)は乾燥地域に大規模な灌漑施設を構築し、水田稲作を行っていた。南インドのチョーラ朝が都アヌラーダプラを廃棄して、ポロンナルワ時代(1017～1255)になり、シンハラ・仏教王権とタミル・ヒンドゥー王権が対立した。都ポロンナルワを放棄して、湿潤地帯に移動したことにより、天水田稲作と海岸部の商業交易を基盤とすることにし、乾燥地帯は1,000年近くも放置されてジャングル化した。

13～16世紀は混乱の時代で、1505年にポルトガル人が香料貿易の基地を求めてスリランカに現れた。彼らはキリスト教化をはかって、仏教を弾圧し改宗させて、海岸部に多くの信者を得た。この信者は南インドの西海岸から移住してきた新興の3カースト、カラーワ(漁民)、サラーガマ(シナモン採り)、ドゥラーワ(ヤシ酒造り)であった。1594年にキャンディ(ウダラタ)王国がポルトガルの承認を受け、この結果、海岸部はポルトガルの植民地支配、高地はシンハラ王権の支配、およびジャングル化した乾燥地帯に区分されるようになった。1657年にオランダに植民地支配が移り、さらに1802年にイギリスの支配下に置かれて、インド帝国に編入された(東京国立美術館・読売新聞社編2008)。

スリランカはプランテーション経済に単一化され、世界市場に組み込まれて、コーヒーから紅茶、さらにゴム、ココヤシ、香辛料の生産地になった。この過程で、南インドからタミル民族の低カーストの人々を労働力として移住させた。1948年にイギリス連邦内の自治領になり、1972年にスリランカ民主社会主義共和国として独立した(杉本1987)。

3) 民族

人口はおおよそ2088万人で、農村部に1787万人、都市部に405万人が居住している。FAOSTAT(2017)の数値では合計値が合わず、実際には約2200万人と推測できる。主な民族集団は表10.4に示したように、シンハラ族 Sinhalese、タミル族 Tamils、ムスリム Marakkala などである。シンハラ族はシンハラ語を用い、仏教徒が多い。タミル族はタミル語を用い、ヒンドゥー教徒が多い。紀元前から断続的に南インドから移住してきたスリランカ・タミルと19世紀にプランテーション労働者として移住させられてきたインド・タミルに分類される。さらに、チェッティとパラワは南インド起源のグループで、母語はタミル語でポルトガル系の姓名をもち、タバコの栽培・販売やココヤシ農園の管理を行い、現在は英語を用いている。ムスリムは主にタミル語を用いるイスラム教徒で、9世紀頃に定住し始めたアラブ系交易民の子孫 Ceylon Moors、17世紀のオランダ支配の時代にマレーやジャワから渡来したグループの子孫 Malays(本来の母語はマレー語)、およびイギリス支配になってから北インドから来た商人たちである。バーガーは主にオランダ人他ヨーロッパ人とシンハラ族との混血出自で、コロンボ周辺に居住し、英語を用いるキリスト教徒(主にカトリック)である。ウェッダー族 Vedda は本来、インド亜大陸からスリランカの山岳地帯のジャングルで暮ら

していたドラヴィダ人種の非定住狩猟採集民と考えられ、現在、定住している集団はシンハラ語を用いる仏教徒になっている（杉本編（高桑）1987）。

表 10.4 スリランカの構成民族（1971）

民族/エスニックグループ	主な言語	主な宗教	居住地標高	人口(約万人)
シンハラ	シンハラ語	仏教		9,131,000
タミル	タミル語	ヒンドゥー教		2,599,000
ムスリム	タミル語	イスラム教		899,000
バーガー	英語	キリスト教		45,000
その他				16,000
ウェッダー	シンハラ語	仏教	本来ジャングル	

狩猟採集民のウェッダー族はスリランカ唯一の先住民で、南インドのコタ Kota、トダ Toda やバダガ Bagaga などと形質的に共通性がある。自称は森の民 Vanniyalätto で、言語は現在、主にシンハラ語を用いている。人口は 1946 年には 2347 人、1963 年には 400 人で、以後、単独の統計値がない。1908 年調査のセリグマン夫妻の民族誌によると、森のウェッダーは狩猟採集、村のウェッダーは定住して家畜を飼い、焼畑 chena でシコクビエ kurakkan や野菜を栽培していた。海岸のウェッダーはタミル族と混血して、農・漁業を営んでいた。1980 年、ウェッダー族の村マヒヤンガナではイネや野菜を栽培して、シンハラ族と変わらない暮らしをしていた。彼らは人類学者によって文化的に周辺・後進として位置づけられ、狩猟採集、焼畑農耕、漁業という非水稻耕作民への偏見が増幅し、さらに狩猟は人口希薄地帯の生活、焼畑は水田と異なり多くの人口を維持できないという生業への偏見も加えられた。人類学者が人種や民族という概念で、人々に断絶を持ち込んだのだ（鈴木 2008）。

私は今、人間の現代生活にとって、生業に関わることの有意を近未来に向けた重要な事柄と考えるようになった。人間は、過剰な便利の呪縛から一時でも逃れ、人間として復興するために、生業、すなわち生きるための伝統的知識や技能を楽しむとよい。

4) 村落生活

人口の約 86% が農村部で暮らしている。就業人口の約 45% (1981) が農業に従事し、彼らはイネ、野菜、雑穀を栽培する小農 (27%) と紅茶、ゴム、ココナッツのプランテーションで働く人々 (18%) である。集落は樹木に囲まれており、全国的にバス交通網は発達している。バス停付近には小さなバザールがあり、村の中には店もある。大きな町村では定期的に市ポラが開かれて、食品・日用品が売られる。

スリランカのカースト制度はインド起源ではあっても、かなり異なっており、バラ

モンが至上というほどではなく、宗教的専門家の位置にある。ジャフナ・タミルでは農民カーストが上位にあって人口の約半数を占め、他は職人カーストとして細分化されている。東海岸のバッチェカロア・タミルでは漁民と農民カーストが優勢で、他は職人カーストである。プランテーションのタミル族はインドにおいて下層カーストであった人々が移住させられたので、大方が下層カーストに偏っている。シンハラ族のカーストは 30 ほどあるが、インドのように 3000 を超えるようなことはない（杉本 1987）。宗教別人口は 1981 年の調査では、仏教徒が約 70%、ヒンドゥ教徒が 15%、イスラム教徒およびキリスト教徒がそれぞれ約 8%、その他は 0.1% であった（鈴木 1987）。

5) 日本軍の記憶

本書の趣旨からそれるが、記しておくべきだろう。第 2 次世界大戦の間に、日本軍がアンダマン・ニコバルを支配したことは第 3 章補論で述べたが、セイロン（スリランカ）についても、1942 年 4 月 5 日にコロンボを爆撃している。第 4 章 4.4 アッサム地域の諸州でもインパール作戦に関しては記しておかなければならない。なぜなら、これらの国や諸州の侵略を受けた人々は、酷い目に遭ったことを心の底では忘れていないからである。こうしたことはよほど親しくしないと、話題にはされない。日本人にとっては、歴史事実を学ぶこともなく、過去のこととして忘れていたが、侵略の被害者たちはその歴史を忘れることはなく、伝承されているのだ。インド、タイ、オーストラリアの友人たちから、この歴史事実を何度か問われ、私が自らの意見を述べた後、私は改めて友人として彼らの信頼を得ることができたのだ。

10.2.2 農業

スリランカでは灌漑水利システムが高度化して、過剰開発が進み、古代シンハラ文明は崩壊して水田はジャングル化して 12 世紀には人口は 10 分の 1 以下に激減し、13 世紀以降、人々は南西部の湿潤地帯に移住することになった。湿潤地帯では灌漑に拠らずに天水田で稲作を行い、小高い所に人家や野菜・果樹園を造った。山間地では焼畑農耕をしていた。19 世紀になってからは植民地政策でモノカルチャー化していった。植民地時代は南西部に人口が集中して、東・北部の大半はジャングルのままであった。1948 年に自治領になってから、乾燥地帯への入植・復旧が進められ、長期的に食料自給政策が進められた。シンハラ人もタミル人も、歴史的にはシコクビエなどの雑穀、タピオカやヤムイモなどの根菜、豆類を食べていたが、1960 年代にイネ米の無料配布が実施されて、イネ米食の比重がさらに大きくなった。アメリカ合衆国の余剰農産物の援助が行われると、パン食も急増して、雑穀食は減少していった。1978 年からの開発計画で、一層、稲作のモノカルチャー化が進行し、同時に、輸入の自由化政策によってインドからの輸入品に押されて、雑穀や根菜類などの畑作物の生産は減少した（中村 2002）。

1) 乾燥地帯

乾燥地帯には、①溜池灌漑による水田稲作と副次的に焼畑耕作を組み合わせる伝統的農村、②大規模灌漑施設による水稲二期作を行う入植地、③北部ジャフナ半島では天水稲作と地下水灌漑による集約的な商品野菜生産を行う農村がある。

焼畑などの初期農耕が始まった時期は不明であるが、稲作は紀元前 5~6 世紀に、インドから灌漑技術と鉄器をもった移住民が乾燥地帯に来て、始めた。溜池灌漑を水系単位の水路でネットワークし、大貯水灌漑網を完成させて、生産性を確保し、古代ラージャ・ラタ文明を成立させた。副次的には焼畑も行っていた。乾燥地帯の自給農民は、収穫を最大化するよりも、干ばつ被害を最小限にする農耕法を選択し、家族の食料安全を確保してきた。水田稲作の灌漑管理のペマタ制度に加えて、シコクビエ（クラッカ）やトウモロコシ（イリング）の播種を、日時を開けて数度に分けて行うようにしていた。シコクビエは乾燥地において、伝統的な焼畑 chena で栽培されていた。雑穀はトウモロコシ、モロコシ、野菜などと混作していたが、おおよそ 1t/ha 前後の収穫であった。

一方、入植地では水が安定供給できるので、水田稲作は二期作で行い、資本投下し、利潤を追求する農業経営を行っている。この地域は出身の異なる人々の集合体であるので、親族関係や伝統的カースト関係は強くない。

インドから侵入したタミル民族の一部がジャフナ半島や東部海岸に定着して、貿易と農業でジャフナ王国を築いた。この地域は乾燥が著しいが、石灰岩層の下の地下水利用によって灌漑農業を行い、自給用のイネや雑穀のほか、噛みタバコなどの商品作物も栽培している。マハ季には天水田稲作、ヤラ季には地下水灌漑による野菜やタバコなどの商品作物と、伝統的にシコクビエの灌漑移植栽培が行われている。高位の農耕民カースト、ヴェッラーラは零細土地所有、低位カーストは農業労働者として生計を立てている。

2) 湿潤地帯

13 世紀に乾燥地帯から南西部の湿潤地帯に移動してきたシンハラ王国は、コーッテ王国とキャンディ王国に分離した。湿潤地帯低地（パハタ・ラタ）は 16 世紀以降西欧の植民地になった。この地域では小規模の水田稲作とココナツ・エステートでの賃労働で暮らしてきた。他方、湿潤地帯高地・キャンディ地方（ウダ・ラタ）はキャンディ王国に含まれていた地域で、水田稲作に加えて、園地での丁子（カランプ）、コショウ（ガンミリス）、ナツメグ（サーディカ）、タバコなどの輸出作物を栽培していた。エステートでは主としてインドのタミル人労働者に頼って、ゴムや紅茶の生産を行っていた。オランダ植民者は農民に野生の肉桂（クルンドウ）の採取を行わせるとともに、コーヒー（コーピ）、コショウ、ココナツ（ポル）、タバコ（ドゥンコラ）、肉桂（シナモン）などの輸出作物のプランテーションを始めた。この際に、南インドから多く

の労働者を連れてきた。1815年に大英帝国にキャンディ王国が征服されるに至り、大規模なプランテーション農業が始まった。水田は標高800mほどが限度で、それ以上は紅茶のエステートと森林となる。ゴムのエステートは300~600m、紅茶は600m以上に展開している（足立明）。

湿潤地帯での営農は、非灌漑農業が主要な地位を占めていた。海岸近くの低湿地や谷あい、水利施設への依存度の低い天水田が開かれた。少し小高い土地に人家が散在し、その周辺に野菜畑や果樹園が設けられた。尾根近くの傾斜地は、家畜の飼料、緑肥、たきぎなどの採取地として利用されていた。人家から遠く離れた山地では、焼畑農業が行われた。焼畑に小屋を建て、約6カ月間ひとりで営農する男性農民が増えた。それにふさわしい家族形態である、一妻多夫制も中央山地で発達した。多様な営農、多様な社会関係が形成されたのである。湿潤地帯の多様な農業が、モノカルチャー化したのは、19世紀のイギリス植民地時代である。シンハラ人とタミル人の主食はイネ米である。しかし、歴史的にはシコクビエをはじめとする雑穀、タピオカやヤムイモなどの根菜類、各種の豆類など多様であった。1960年代にイネ米の無料配給が実施された事情もあり、イネ米食の比重が高まっている。また、米国の余剰農産物援助が行われるようになってから、パンコムギ食も急増し、雑穀消費は減退しつつある。水田面積は、全農地の約二割を占め、約50万人が稲作農業に従事している。独立後の水稻栽培面積と単位面積当たり収量との増加は、実にめざましい。プランテーション農業の停滞とは対照的である。歴代政権の農業政策は、もっぱら稲作生産の向上をめざしていた、といっても過言ではない。稲作のモノカルチャー化が進んだのである。水稻以外の農業生産は、あまり向上していない。多くの畑作物では、1980年代に入って減産傾向がみられる。1978年以降の輸入自由化政策により、インドからの輸入品との競争に敗退したものもある。伝統的にジャフナ半島で生産されていたタマネギとトウガラシは、60%も生産が減少した。輸入自由化による経済的苦境が、ジャフナ・タミル農村青年をイーラム独立運動に追いやった原因のひとつでもある。雑穀や根菜類も生産が減少している模様であるが、もともとこれらの生産統計は信頼性が低い。プランテーション作物への過度な依存を少なくするため、政府は他の小輸出作物の生産を奨励している。マハヴァリ水系開発の基幹部分は、ほぼ完成した。灌漑地面積が増え、灌漑農業への特化が進行している。灌漑農業への集中は、過剰開発の危機を一層増幅する恐れがある（中村2002）。

表10.5に示したように、穀物に関しては、イネの栽培面積約79万ヘクタールで、約162万トン、同じくトウモロコシは約5万ヘクタールで約20万トン、雑穀は約4千ヘクタールで約5.6千トン、モロコシは約800ヘクタールで約1.3千トン、大麦と小麦に関しては統計値がなかった（FAOSTAT2017）。

表 10.5 スリランカの穀物生産（2017）

穀物	栽培面積ha	生産量tonnes	収量hg/ha	hg=100g
オオムギ				
トウモロコシ	52544	195744	37253	3725.3
雑穀	4205	5574	13256	1325.6
イネ	791679	1620544	20470	2047
モロコシ	834	1300	15586	1558.6
コムギ				

図 10.4 には 1961 年から 2017 年までの穀物の栽培面積 ha と生産量 tonne の推移を示した（FAOSTAT2017）。上のグラフではイネが圧倒的に多く、雑穀の生産量が不明瞭であるので、下のグラフに雑穀のみを拡大して示した。イネの栽培面積は漸増、生産量は 2013 年までは急増してきたが、なぜかその後、生産量は急減している。雑穀（シコクビエ、キビ、アワ）とモロコシは漸減の一途をたどってきた。しかし、1970 年代前半に生産量の増大があった理由はわからない。

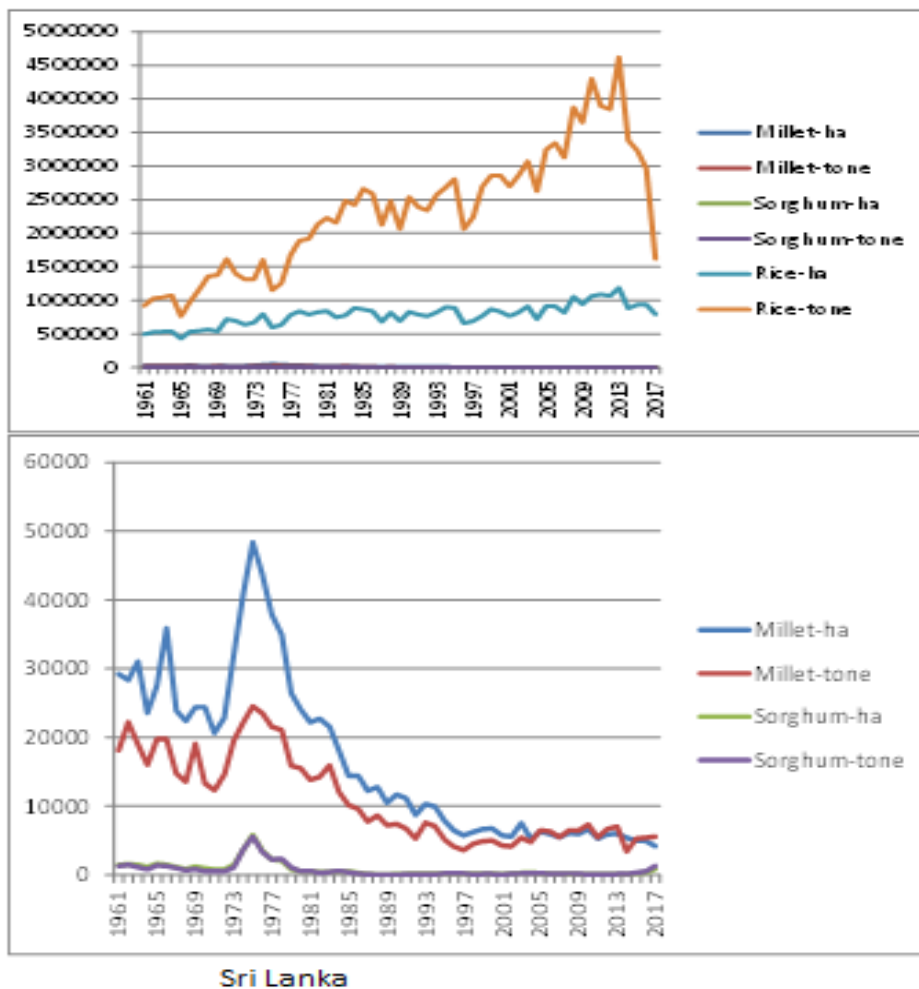


図 10.4 スリランカの穀物生産の推移（1961-2017）

表 10.6 に示されているように、小粒雑穀 small millets はシコクビエ、キビおよびアワが栽培されていた。1975 年から 1984 年までの雑穀栽培状況は面積において、シコクビエは約 44,000ha から 38%ほどの約 17,000ha に、キビ（約 2,500ha）とアワ（約 425ha）は急減していたことが見て取れる。その後、シコクビエもさらに減少して 1989 年には約 11,000ha になった。キビは 1988 年に栽培面積は 558ha に若干回復し、短い雨期に適しているので、Hambantota と Monaragala で 4 月から 6 月に栽培されている。アワはジャフナ半島の灌漑地で 5 月から 8 月の乾期に栽培されており、これも 1988 年には栽培面積 267ha に若干回復していた（Ponnuthural 1989、1993）。

表 10.6 スリランカにおけるイネと比較した雑穀の生産の動向（Ponnuthural 1989）

TABLE 1
Trends in millet production compared with rice in Sri Lanka

Year	Finger millet		Common millet		Foxtail millet		Rice	
	Area (ha)	Production (tonnes)	Area (ha)	Production (tonnes)	Area (ha)	Production (tonnes)	Area (ha)	Production (tonnes)
1975	43,836	17,873	2,501	489	425	173		
1976	39,526	17,640	1,072	841	284	195		
1977	34,617	16,360	1,103	1,083	173	134	782,618	1,680,861
1982	16,035	13,300	—	—	—	—		
1983	20,595	11,662	934	934	24	24	825,833	2,499,567
1984	16,489*	6,570	—	—	—	—		

*Area grown in the wet season only
Source: Dept. of Agriculture, Sri Lanka

シコクビエとアワは北東モンスーンの雨期（9 月から 1 月）に栽培され、主な栽培地域は図 10.3 と表 10.7 に示した。乾燥地帯の降雨量は 1270～1900mm/年、中間地帯では 1900～3175mm/年、湿潤地帯では 3175mm/年以上である。これらすべての地域で、シコクビエとアワは北東モンスーン（9 月～1 月）の時期に栽培する。ジャフナ地域では乾期（4 月～6 月）に灌漑耕地で栽培している。在来品種と改良品種の収量は 1200～2000kg である。キビは乾燥地帯では乾期（3 月～6 月、降雨量 200mm～不確実）に切り替え畑で栽培される。

表 10.7 1985 年に雑穀生産が重要であった地域と栽培面積（Ponnuthural 1989）

TABLE 2
Important areas of millet production and their coverage in 1985 (Area in ha)

District	Finger millet	Common millet	Foxtail millet
Anuradhapura	7,600	13	—
Hambantota	1,165	14	23
Ampara	750	—	—
Jaffna	390	91	—
Matale	2,070	8	—
Monaragala	1,965	40	49
Kurunegala	1,440	6	2
Ratnapura	470	57	11
Kandy	400	—	—

Source: Dept. of Agriculture, Sri Lanka.

10.2.3 食文化

スリランカの家庭料理は、めし、キリホディ（スープ）、魚のカレー煮、ナスの油炒め、青菜とココナッツのあえもの、ココナッツサンボル（辛いふりかけ）のように、日本の家庭料理と組み合わせではよく似たスタイルであるが、スパイス類やココナッツが多用される点で違いがある。煮込み料理で汁気が残っているものをカレーと称している。肉や魚、野菜や豆類がカレーの食材として用いられる。野菜炒めにはジャガイモ、ナス、ニガウリなどが、サラダにはニンジン、キュウリ、ニガウリなどが食材になる。穀類は、イネ（赤米もある）がめし（粒食）、キリバット（めしを牛乳で叩き固めた食品）、ホッパー（粉食、おやき様食品）、ストリング・ホッパー（うどん様の食品）、コムギがロティ（ココナッツ入りパン）、パティス（揚げギョウザ様の食品）として用いられる（鈴木 1986）。

シンハラ族は 3 食制で、シンハラ族の朝食は、ロティー、string および卵 hoppers（クレープ様の食品）、小麦粉を球形にするか、イネ粉と削りココナッツを竹筒の中で蒸したピットウ pittu、kiribath およびココナッツ・ソースと sambols である。イネ米粉を練って円盤状にしたアップパ appa は粗末な食品の古典的な一例である。Indiappa は麵状の hoppers で一山の蒸した vermicelli である。これらにカレーを付けて食べる。現在は調理の手間を減らすためにパン食が普及してきた。昼食はめしとカレーを食べる。副食には菜食主義であるので野菜を多用して、肉や魚は高価でもあるのであまり食べない。夕食は軽く済ませる。紅茶はイギリス植民地支配の影響で、19 世紀末からよく飲む。ムスリムやキリスト教徒は肉も魚もよく食べる。野菜には、ナス、カボチャ、タマネギ、ニンジン、ウリ {数種}、マメ {数種}、ダイコン、ホウレンソウ、オクラ、ジャック {・フルーツ}、パンノキの実、ムルンガ {モリンガの葉} などがある。タミル族の調理は、豆類やイネ粉で作る dosai、ulundu、vada、marusala vada のよう

に、植物性食材が多い。ムスリムの料理は典型的にサフランとローズウォーターを用いている。マトンカレーやビリヤニ buriani と一緒に、ゴドウンバ・ロティ godumba、濃マレー・カスタード wattalappan を食べ、濃厚なスパイスを加えたミルクコーヒー kahuwa を飲む (Discovery Channel 2004、杉本 1987)。

スリランカでは雑穀は補助的な食料で、貧しい人々の穀物である。製粉して、かゆ、ピッツウ麵様の食品、ロティにする。かゆには時々、エビ、野菜やイネ米を加える。ロティやピッツウには雑穀粉にココナッツを加える。コムギ粉と混ぜてケーキも作る。キビはめし、ビリヤニ、製粉してホッパー、さらにお菓子も作る。雑穀粒はニワトリ、茎葉は家畜の飼料にする。アワ粒はペットの小鳥の餌にする (Ponnuthural 1989)。

10.3 まとめ

バングラデシュは大河川の河口部にある大デルタ地帯で稲作を行っている。近年、ボロ・イネの作付面積が増大して、2000 年代末にはイネ米の生産量は充足できた。したがって、畑作物の生産に関しては熱意が低下したと考えられる。バングラデシュでは急激な人口増加と均等相続により土地の細分化と流動化が進み、農村は窮乏化を極めた。零細農家は経営基盤が不安定であるので、農業への関心が弱く、人口増加や消費量の増大により、都市や海外への出稼ぎに向かっている (外川昌彦、杉江あいおよび藤田幸一 2018、日本ベンガルフォーラム・第 2 回シンポジウム)。

スリランカでもイネの増産によって、雑穀の生産量は減少している。今後、気候変動、人口増加、健康食などに対応して、雑穀の再評価はあるのだろうか。雑穀に関わる農耕文化複合を継承する必要性を再考してほしい。

文献

Discovery Channel 2004, Insight Guides, Sri Lanka, Apa Publications GmbH and Co., Singapore.

Islam, M. H. 1993, Present status of millet research and production in Bangradesh, by K. W. Riley, S. C. Gupta, A. Seetharam and J. N. Mushonga 1993, Advances in Small Millets, 149-158, Oxford & IBH Publishing CO> PVT..LTD. New Delhi, India.

東京国立美術館・読売新聞社編 2008、スリランカー特別展輝く島の美に出会う、読売新聞社、東京。

Majid, M. A., M. A. Hamid and Mannujan 1989, Importance, genetic resources and breeding of small millets in Bangradesh, ed. by A. Seetharam, K. W. Riley and G. Harinarayana 1989, Small Millets in Global Agriculture, 71-76, Oxford & IBH

Publishing CO. PVT. LTD. New Delhi, India.

中村尚司 2002、第 9 章スリランカ、柳澤悠編、現代南アジア④開発と環境、東京大学出版会。

Ponnuthural, S. 1989, Importance, genetic resources and breeding of small millets in Sri Lanka, ed. by A. Seetharam, K.W.Riley and G. Harinarayana 1989, Small Millets in Global Agriculture, 77-84, Oxford & IBH Publishing CO. PVT. LTD. New Delhi, India.

Ponnuthural, S. 1989, Cropping systems, production technology, pests, diseases and utilization of small millets in Sri Lanka, ed. by A. Seetharam, K.W.Riley and G. Harinarayana 1989, Small Millets in Global Agriculture, 279-286, Oxford & IBH Publishing CO. PVT.LTD., New Delhi, India.

Ponnuthural, S. 1993, Cultivation of finger millet (*Eleusine coracana* L.) and other small millets in Sri Lanka, ed. by K.W.Riley, S.C. Gupta, A. Seetharam and J.N. Mushonga 1993, Advances in Small Millets, 139-148, Oxford & IBH Publishing CO> PVT..LTD. New Delhi, India.

ポチュェ, J. 1999、山内彰・西川隆訳 2003、食料確保の人類学、法政大学出版局、東京。
杉本良男編 1987、もっと知りたいスリランカ、弘文堂、東京。{本書では、足立明、鈴木正崇、渋谷利雄、および高桑史子らの記述項目からも引用した。}

鈴木正崇 2008、ウェッダー—スリランカの先住民の実体と伝承、綾部恒夫監修・金基淑編、講座世界の先住民 03 南アジア、192-212、明石書店、東京。

鈴木孝男 1986、スリランカの家庭料理、カタツムリ社、仙台。

高田峰夫 2008、綾部恒夫監修・金基淑編、講座世界の先住民族 03 南アジア、170-190、明石書店、東京。

臼田雅之・佐藤宏・谷口晋吉 1993、もっと知りたいバングラデシュ、弘文堂、東京。
{本書では、安藤和雄・菱口善美・内田晴夫の記述項目から引用した。}